第 13 回日本生殖看護学会
岡山県、2015.09.13

悪性腫瘍で配偶子および受精卵凍結を希望する患者支援

医療法人三慧会　ＩＶＦ大阪クリニック　○三浦智香　福田愛作

Ⅰ．緒言

近年、がん治療の進歩により寛解治癒を迎える若年がん経験者が増加している。臨床の現場においても、若年がん患者の妊孕性低下が考えられる場合、治療開始前に配偶子・受精卵の凍結保存を提案される機会も増えつつある。A 院においても凍結希望患者が増え、2013 年 2 月より医師・看護師・認定遺伝カウンセラーを中心とした専門チームを立ち上げ支援を行っている。これまでの看護支援体制の評価と今後の課題を検討したので報告する。

Ⅱ．実践内容

がん治療開始前に配偶子・受精卵凍結を希望する患者を対象に、初診問い合わせ時より専門チームの看護師が対応し、診察は専門チームの医師が担当している。初診前から凍結完了まで段階的に統一した情報収集・提供が行えるように専用の問診票・チェックリストを使用し、担当看護師が個室にて面談を実施し、情報整理及び疑問への回答や不安の解消に努めた。チーム内で患者情報が共有できるよう、初診問い合わせ時だけではなく、来院後も適宜チームミーティングを行い、必要時は医師と連携を取りスムーズに治療が進むよう支援した。倫理的配慮として、個別に得られた情報は研究以外で使用しないこと、事例の公表に際しては個人が特定されることがない旨を口頭及び書面で説明し同意を得た。

Ⅲ．結果

専門チーム結成後の 2013 年 2 月から 2015 年 3 月までの受診者は受精卵凍結希望患者 10 名、卵子凍結希望患者 5 名、精子凍結希望患者 13 名であった。受診者の中には、生殖医療を受けることで原疾患が悪化するのではという恐怖心から治療を中断した患者や、相談のみで治療を終えた患者もいた。問診票、チェックリストを用い対応することで、初診の問い合わせ時より早期の対応ができ、患者背景やニーズを把握し、医師との連携を取りながら、必要な時に統一した情報収集及び情報提供ができた。チーム内ミーティングを行うことで通院患者の情報がチーム全員で把握でき、担当看護師不在時もチーム内での継続看護が可能であった。

Ⅳ．考察

問診票・チェックリストを活用し専門チームで患者対応することで、必要時に正確な情報提供ができたと考える。診察後に担当看護師が個室にて面談を行うことで、患者の理解度や精神面の把握ができ、患者の抱える問題点も把握できた。チームミーティングを行うことは、患者情報の共有・継続看護のみならず、患者対応の際の疑問点や問題点の共有ができ、患者支援につながる有効な場であると考える。

Ⅴ．今後の課題

患者を受け入れるにあたり、生殖医療チームとして患者背景や原疾患を理解する事が重要である。そのためには自己研鑽に努め、知識の構築をする必要がある。又、施設間の連携が可能となるようホームページの内容を見直し、患者のみならず施設側も生殖医療について情報収集できるよう改善したいと考えている。今回、医療者側として有効な看護支援ができたと判断しているが､患者側からの評価を調査できていないので今後の課題とする。